

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

東京大学医学部附属病院肝胆膵外科・人工臓器移植外科における研修を終えて

岐阜大学医学部消化器外科

三井 範基

この度、日本臨床外科学会による国内外科研修制度により、2026年1月19日から1月30日まで、東京大学医学部附属病院肝胆膵外科・人工臓器移植外科において研修の機会をいただいた。同科は、豊富な症例数と確立された治療体系を有する、本邦屈指のhigh volume centerの一つである。肝移植および肝胆膵外科一般手術の見学を中心に、カンファレンスや回診、病棟・外来・処置の見学など、診療の様々な側面から多くのことを学ばせていただいた。

移植外科領域においては、生体肝移植および脳死肝移植を見学した。手術においては、多くの経験と深い移植治療への理解に裏打ちされた、見事な手術を間近で体感することができた。周術期管理においても、術前カンファレンスや移植カンファレンスを基盤として、手術前後の患者について慎重な検討が行われており、綿密な治療計画と情報共有により、ドナー・レシピエント双方の安全性を最大限に担保する診療体制が構築されていると感じた。移植手術に携わる機会のなかった私にとって、すべてが新鮮であり、また、激務の中でも綿密に、多くの移植患者が安全に管理されている点から、その診療レベルの高さを強く感じた。

肝胆膵外科一般手術においては、膵頭十二指腸切除術をはじめ、開腹肝切除、低侵襲手術（腹腔鏡下肝切除、ロボット支援下肝切除、腹腔鏡下胆嚢摘出術）など、様々な手術を見学できた。若手医師が互いに刺激し合いながら活躍しており、また、それをしっかりと支え、的確な指導をする指導医の先生の存在も印象的で、高い診療レベルに加えて若手の教育も高い次元で両立していた。低侵襲手術は、医療経済的な側面や患者利益など細やかなところまで磨き上げられており、本質を見据えたコンセプトのもとで、最先端医療が冷静に臨床へ落とし込んでいる点に感銘を受けた。

病棟回診や処置への同行を通じ、周術期管理の重要性とその質の高さも強く印象に残った。高度な侵襲を伴う手術を多数担う施設であるからこそ、術後合併症の発見・早期対応への意識が極めて高く、細部にわたる配慮の積み重ねが良好な治療成績を支えていることを認識した。

本研修を通じて、肝胆膵外科修練医としての自分自身、ならびに自施設の立ち位置と課題を明確にすると同時に、今後目指すべき肝胆膵外科医としての姿をイメージすることができた。今回の研修で学んだ、1人1人が情熱をもって臨床や研究に取り組む姿勢、豊富な経験や確かな根拠に基づく診療、高度な手術手技、そして多職種連携によるチーム医療の重要性を、今後の臨床に必ず還元していきたいと考えている。

最後に、日々の激務の中、研修を快く受け入れてくださいました教授の長谷川潔先生をはじめ、研修の窓口としてご尽力いただきました高本健史先生、また、市田晃彦先生はじめ、温かく迎えていただきました教室員の先生方に、心より感謝申し上げます。また、今回研修の機会とご支援をいただきました日本臨床外科学会、研修へ推薦いただきました当科の松橋延壽教授、ならびに研修期間中ご支援いただきました岐阜大学消化器外科の医局員の先生方にも、この場をお借りして深く感謝申し上げます。



市田先生チームの皆さんに歓迎会を開いていただきました。



研修最終日、市田先生と。